

[花の美術展によせて]

## 蓮華文様の象徴性と仏教

当館では文華苑に咲く花の数に劣らず、所蔵の美術品にも多くの花々が咲き誇っています。牡丹、百合、梅、桜、蓮華、萱草、菊、芙蓉、紅蜀葵、藤、夕顔、鉄線、蘭、萩、椿、紫陽花、尾花、そして空想の花・宝相華さえも。

それらを集めた展覧会に因んで今日は蓮華の文様について少し述べて見たいと思います。

この文様はエジプトで早くからパピルスと共に登場し、ロータスと言われていますが、それは「睡蓮」を指す場合が多いようです。紀元前14世紀の王宮址の床面装飾(エジプト博物館蔵)としてカモヤパピルスと共に描かれた沼地の青い睡蓮、また、同じ頃の象牙の箱の蓋(同館蔵)に描かれたブドウ園のあずまやの中で、若い王夫妻の王妃が手にする青い睡蓮、これらは神の恵みあまねき自然や生命の謳歌を象徴すると考えられています。これに対し、フェニキアの紀元前10世紀に再利用されたとされるアヒラム王の石棺(ペイルートの国立考古博物館蔵)では、王が手にするさかさまの睡蓮は王の他界を示し、縁飾りの連続文様として浮彫りされたさかさまの睡蓮が死や悲しみを象徴すると説明されています。

「満瓶」パルフトの欄楯 BC.100年頃



インドでも睡蓮が蓮と同じく描かれてきましたが、特に「蓮」が仏教文化の象徴的な文様として取り入れられ、それがガンダーラ及び日本までのアジアに広く及んだことは周知の通りです。その理由は泥中より出て清浄な花を咲かせることが 解脱 に例えられたと言います。

インドでは紀元前100年頃とされるパルフトの欄楯(スチューパを囲む垣根)に開花蓮華の円形図様や、水瓶から蓮華が生え出る「満瓶」のモチーフが浮彫りされています。蓮華は瓶から生じていく重にも分かれ、蕾・半開・全開の花が区画を一杯に埋めます。蓮華は繁栄・増殖・吉祥の象徴とされて人々の想像力を高めました。その結果、瓶に替って矮人の形のヤクシャの口や膺から蓮華唐草が生え出、象の口から吐き出された蔓草は 望みのものを授けてくれる蔓草 へと変貌していきます。上記のような蓮華の円形図様や「満瓶」のモチーフに似た表現はガンダーラの石彫(恐らく1世紀以後のもの)にも見えますが、そのガンダーラの仏像の影響が濃く現われている中国4世紀頃(五胡十六国時代)の金銅如来坐像(恐らく釈迦像、ハーバード大

金銅如来坐像 五胡十六国時代 4世紀



学附属フォッグ美術館蔵)の台座の中央にインド風の「満瓶」が浮彫りされているのは興味深く思われます。台座の両側で獅子が正面を向くのもインド的で、中央では小さな瓶から多数の大きな蓮華や蕾が両側に太い茎を伸ばし、華は花弁を下に向け、大きな花芯は上を向いています。この蓮華の形もパルフトの「満瓶」の蓮華に似ています。思えば、ガンダーラの蓮華菩薩もこのような蓮華枝を手にはしています。金銅如来の台座正面を満たして浮彫りされた「満瓶」は単なる供養花ではないでしょう。上記のインドのスチューパ(釈迦の遺骨を祀る施設)の垣根装飾の「満瓶」と形のみならず意味においても無関係ではないようです。つまり、当時の仏への帰依が、インドも中国でも仏教的と言うより、まだ古代信仰的なもの(繁栄・増殖・吉祥)を残していたことを示しているのではないかと考えられます。この如来坐像は五胡十六国時代に多数作られた金銅如来坐像の中で最も優れた大型(高31.8)の仏像です。後に小型化され大量生産されたこの時代の如来坐像では、も早や、瓶の表現が失われ、茎も持たない蓮華の一華のみが中央に残ります。ただ、華の形はインドの典型的な下向き花弁を踏襲しています。

中国ではその後、5世紀の雲岡石窟では仏像の方形台座の中央に蓮華に替って道教の儀式に用いる博山形の香炉が仏教でも重要な容器として描かれ始めます。この香

左図の部分(描き起こし図)



炉が採用された理由が、蓮華の蕾にその形が似ていたからであると説(国立中央博物館「美術資料」53、54、趙容重氏論考)は興味深いものです。この博山形香炉は実際、炉身の部分に蓮弁を巡らした蓮華形香炉へと変化して行き、そ焔根元から唐草状の蓮茎や忍冬文、火文が派生し、果ては、唐草の先端の蓮華に菩薩や僧形が化生するようになります。このような蓮華形香炉は仏への香華供養の一つにまとめた感もあります。また、この道教の博山炉の転用とそこからの派生文様について、「道教の神仙思想の不老長寿の生成観を仏教の蓮華化生に転換させたものである」とする趙氏の見解に注目されます。つまり、この考えに従えば、上記のエジプト以来の、また、インドで強調された蓮華の「生命観」が、中国の仏教美術の中に華やかに結実していると言えるからです。

この蓮華がインド以来、仏像の台座とされたことは周知の通りで、その理由も蓮の生命力と無関係ではないでしょう。つまり、蓮華の「清浄さ」とは別のより強い力への憧憬が込められた結果ではないかと思われるのです。

(村田靖子)

北斉天保2年(551)銘 石造仏碑像(部分)

